
東方桃球伝

慧龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方桃球伝

【Nコード】

N0116Z

【作者名】

慧龍

【あらすじ】

神のミスで死んだ主人公はテンプレどおり能力をもらって東方の世界へ転生するが…。作者は初心者で一話が短いうえ亀更新になるかもしれませんがよろしく願いします。

プロローグ（前書き）

初心者なので日本語が変な所もあるかもしれないうえ、一話一話が短いですがよろしければ読んでください。

プロローグ

気がつく俺は真っ白な空間にいた。

どうやら俺は死んだらしい。

目の前にいる爺さんの話を信じればの話だが。

「いや、すまんかったのう。わしのミスで殺してしまつて」

どうやらこの爺さんは神様らしく、ちょっとしたミスで俺を殺してしまつたらしい。

「というわけで、お前さんをお詫びとして別の世界へ能力つきで転生させたいのじゃが、規則で

決まつてくじ引きで選ぶことになる。じゃから、この中から選んでほしい」

そう言つと、俺の目の前に穴の開いた箱があらわれた。

この中から選ぶのか。ふむ…これにしよう

ひいた紙に書かれていたのは『東方Project』

「東方の世界か、ならば妖怪の体に生まれ変わらせよう。次は能力じゃが、これは漫画などのキャラクターの名前が書いてあり、その者の肉体と能力を与えることになっておる」

それはつまり『モンキー・D・ルフィ』とか書かれた紙をひいたらルフィの肉体とゴムゴムの実の能力を得るということか？

「まあ大体そんな感じじゃ。ほれ、次の紙を引かんか」

新しい箱が出てきたので、俺は神の言うとおりにくじを引いた。そこに書かれていたのは。

『星のカービィ』

「……………」

重苦しい沈黙が辺りをつつむ。

俺も神もしばらく言葉を発することができなかった。

「あゝ、じゃあ転生の準備を「待てい!!」…なんじゃ?」

「なになかったことにして話を進めようとしている!!なんだよカービィって!!」

「知らんのか?人気ゲームの主人公じゃが「そういうことじゃない!なぜカービィを入れている!」

この爺さんはいきなり一頭身になれと言われた人間の気持ち理解できないのだろうか。

「あゝ、同情はするが規則じゃからの。あきらめてくれ。それじゃあの」

そう言うと俺の足元に穴があいた。

「ちよっ、まだ話は終わってないぞおおおっつ!!!!」

そして俺は重力に従い落下していき、そこで意識が途切れた。

プロローグ（後書き）

のんびりとやっていききたいです

1 話（前書き）

長い話が書けない…

1話

目が覚めると森の中だった。

起き上がると自分の目線が異常に低いことに気づく。

「本当にカービィの体になってるし…」

ピンクでつるつるになった自分の手を見て一人落ち込む。

「だが今更文句言ったってどうしようもないか…」

恨むなら神様じゃなく自分の籤運の悪さを恨むべきだな。

「しかし、今はいつの時代でここはどこなんだ？」

あたりを見回しながら独り言をつぶやいていると妙な物を見つけた。
携帯電話のようだ、拾ってみると着信音が鳴ったので電話にでる。

『おお、つながったようじゃの』

この声は神か。

「なんの用だ？わざわざこんなものを用意して」

『いや、問題がないか確認のためじゃ。なにか問題はないかの？』

転生先の体が一頭身なのは問題じゃないのか？

「転生先の体が一頭身なのは問題じゃないのか？」

『思ったことそのまま口に出したじやろう』

だってこの体、動いてみるとすごい違和感を感じるんだが。

『まあそれはともかく、能力の説明じゃ。その体は「コピーのもとDX」を全コピー能力分持つとる状態じゃから念じれば好きなコピー能力が使えるぞ』

へえ、じゃあちよつと試してみるか…。『ソード』！

念じてみると俺の体が一瞬光り、次の瞬間には俺の右手に剣が握られていた。

『それから、そっちの世界で新しくコピーしたものは一度能力を解除すると、もう一度同じものを吸い込まんと使えなくなるから注意するんじやぞ』

そこはゲームと同じなのか… わかった。

『それじゃあそろそろお別れじゃの。その携帯はワイプスターを呼ぶことができるから大切に持つておくんじやぞ』

そう言うつと電話が切れた。

全裸なのにどこに持っていればいいのかと思ったが、とりあえず口の中にいれて飲み込んでおいた。

たぶんこれで大丈夫だろう。必要になったときは吐き出せばいい。

「それじゃ、ここはどこか探索でもするか」

護身用に剣を持ちながら俺はその場をさった。

1 話（後書き）

ご感想をお待ちします。

1 2 / 3 コピー能力の名前に『』をつけるように変更しました

2話

どうも、カービィです。

カービィの肉体に日本人の名前なんて似合わなくね？ということ、これからはカービィと名乗ります。

さて、俺が現在何をやっているかというと…

「こつちくんあああつっ！！！」

でかい妖怪に追っかけられてます。

いやコピー能力自由に使えるからといったって、いきなり出てきたムカデの化け物なんて対処できるわけがない。むこうは俺のぷにぷにボディが美味そうに見えるのか一向に諦めるつもりがなさそうだ。

（考える、どうすれば逃げ切れる？なにかいいコピー能力は？）

転生直後に死んじゃった、なんて洒落にならないので必死で考える。

（逃げるには、何かスピードのあるやつ…。そうだ！『ジェット』！）

急いで『ジェット』と念じると、体が光り『ジェット』になる。

（よし、これで飛べば…）

そう思い、ジェットエンジンを起動させ飛ぶ。しかし…

「おぶう！ぐほお！」

初飛行で細かい操作ができるはずもなく、木々にぶつかりながらその場を逃げた。

「能力の確認をしておこう」

顔をしかたま打ち付けて、ひとまず安全な場所に逃げた俺はそうつぶやいた。戦闘能力を考えないとどうにもならない。

まず、俺にできることを考えてみる。

俺の能力は大きく分けて二つ

・カービィの全コピー能力

・他者の能力のコピー（ゲームやアニメのように一度解除するともう一度コピーしない限り使えなくなる）

その他にも吸い込みやホバリングもおそらくできるだろう。

しかし、問題は他者のコピーがその場限りだということ。つまり、その辺の能力持ちを吸い込んで

俺TUEEE展開はできない。なので、元々おれが持っている『ソード』などのコピー能力で戦うのがメインになる。だが…

「経験値が足りないんだよな…」

襲われてわかったが、いきなり敵と戦うなんて無理すぎる。さっきも『ソード』を装備しておいたが相手を前にした瞬間、逃げるしかできなかった。

「やっぱり特訓しかないな」

このままでは、この森を抜けるどころか生き残れるかも怪しい。

「まずはいろんな技の練習だな」

いつ襲われても対処できるように、俺はコピー能力を鍛えることにした。

2 話（後書き）

話が全然進まない…

ご感想お待ちしております。

1 2 / 3 コピー能力の名前に『』をつけるように変更しました

3話（前書き）

今更ですがWiiのカービィまだやってないんですね。
買わないと技がよくわからないから小説に出しづらい…

3話

「おおおっ！ライジンブレイクッ！」

オーラをまとった右腕を相手に向かって振り上げる。狼型の妖怪は、その一撃をくらい動かなくなった。

どうも、カービィです。あれから数年の特訓の末、ついにこの森では倒せない相手はいなくなりました。

「今晚のおかず、獲ったど〜！」

この妖怪は今からおいしくいただきます。妖怪が食えるのかって？ブロックなどあきらかに食べ物でない物ですら吸い込み、飲み込む究極の雑食であるカービィボディをなめないでもらおう。

「調理開始」

俺は『コック』に変身し、調理を始める。数年間の特訓でわかったのだが、コピー能力は技術面や身体能力に影響を及ぼすらしい。『ファイター』や『スープレックス』になれば肉体が強化されるし、『ソード』や『カッター』になると素人の俺でも武器の扱いがうまくなる。そして…

「『コック』だと作る飯がうまくなるんだよね」

鼻歌を歌いながら、『コック』の基本装備である鍋に狼妖怪を入れる。『コック』はアニメと同じように敵をそのまま調理することも、ゲームのように普通の食べ物に変換することもできる。特訓と食事しか娯楽のないこの森の中でずいぶん役に立ってくれた。

妖怪を調理し、食べ終わった後、俺は考えていた。

（そろそろこの森から離れるかな）

ある程度の戦闘能力はついた。今なら旅に出て敵に襲われても遅れをとることはないだろう。

せっかく東方の世界に来たのなら、世界中を回ったり原作キャラに会ってみたい。ってゆうか、この森って知能の低い妖怪しかいないくて話相手がいなかったから誰かと話したい。

「よしっ、そうと決まれば早速行動！」

あと何匹か妖怪や獣を狩って、旅用の保存食を作ろう。そう決めて俺は『ファイター』になり、再び狩りを始めた。

「準備完了っ」と

次の日、俺は全ての旅支度を整えた。つといても荷物は食べ物しかなく、その荷物も『バブル』で泡の中に入れて体内に保管してあるから荷物はないに等しい。

「この森ともお別れか…」

目をつぶれば思い出す…、初めて来たときムカデの化け物に追いかけられたこと。初めて生き物をしとめて夜眠れなくなったこと。前世のことを思い出し一人泣いていたこと。

「…ろくな思い出がねえ…」

少しブルーな気分になりつつ、神からもらった携帯電話をとりだし操作した。

「そっぴや初めてワープスター呼ぶな。え〜と、このボタンかな？」

適当にボタンを押して待つこと数秒、空の彼方からワープスターが飛んできた。

「よしっ、忘れ物もないし出発だーっ」

とりあえず適当な方向に行き、人間か知性のある妖怪の集まっている場所を探す。

そう思いながら、俺は森から飛び立った。

3 話（後書き）

感想お待ちしています

4 話（前書き）

作者は歴史とかに非常に弱いので、なにかおかしい部分があるかもしれない。

なので間違いがあつたら優しく指摘をしていただけるとありがたいです。

4 話

「おっ、町が見えてきた。いや建物を見る限り都といったほうがいいか？」

ワープスターで移動して数時間、やっと遠くに人の住んでいそうな場所が見える場所についた。さすがにこのまま町に入るわけにもいかないの、住民に見つからないよう離れた場所に着陸する。

「さて、どうやって忍び込むか…」

人のいる所に行きたいとは思っていたが、よくよく考えればこの姿で人前にでるわけにはいかない。絶対に妖怪と思われるだろう。

「人目につきにくいとなると『ミニマム』だな」

そうと決まればすぐ実行。都まで人目につかないよう走って近づき、『ミニマム』で小さくなって都に侵入した。

ふう、なんとか侵入成功だ…。

途中で猫に追いかけられたときはあせったが、なんとか逃げ切れた…。

さて、いろいろと人の噂話を盗み聞きしたところ、なにやら絶世の

美女がいるだの五つの難題だのという話で持ちきりだった。

これはおそらく輝夜のことだろうと思う。

つまり俺は平安時代に飛ばされたということになる。ずいぶん昔に飛ばされたものだ。

（東方の世界に来て数年、ようやく原作キャラに近づけたな…）

このチャンスは絶対に無駄にはしない、ぜひ絶世の美女と噂のかぐや姫を一目見るだけでもせねば。そう思いつつ俺はその場を後にした。

移動中また猫に見つかって追いかけられたのは、お約束というものだろうか…。

夜、人通りが少なくなった時間、俺は都のなかでひとときわでかい屋敷に侵入しようとしていた。噂話だけで屋敷を特定するのは骨が折

れたが、おそらくここだろうとあたりをつけることができた。

「さて、潜入といきますか」

ちなみに今の俺の姿は、潜入が得意そうだと思い『ニンジャ』にしている。

…ふう、潜入成功だ…。見張りがいるが、ただでさえ体の小さい俺が足音をたてず人目につかないよう動いてるせいか気づく心配がない。そのまま天井裏に忍び込み、そこから輝夜をさがすことにした。

「…しかし今の状況をよくよく考えると、俺って犯罪者？」

深夜、女性の顔を見るために屋敷に侵入する。人の姿だと見つかったら通報されてもおかしくないレベルだ。

「…まっ、妖怪に法律なんて通用しないってことで」

多少の罪悪感をのこしつつ、俺は輝夜探しに集中した。

「こちらスネーク、目標を発見した」

潜入するとスネークごっこをするのはなぜでしょうかね？

それはさておき、俺はようやく輝夜を探し当てた。ゲームと現実では顔つきが違うが、はっきりと輝夜だと断言できる。

なぜなら、本当にこの世の者とは思えないほどに美しいからだ。

（おお、眼福眼福）

つい見とれている内に身を乗り出してしまったのがいけなかったのだろう。天井の板が壊れ、そこから落ちてしまった。

「ぐほおっ！」

「……っ、誰！？」

しまった、見つかってしまった。このままでは輝夜が衛兵を呼んでしまいかねん。なんとかごまかさなくては。

「ええーっと……ご注文頂いた龍の首の珠でございます」

ウィンクをし、笑顔でそう答える。すると輝夜は笑顔になり。

「わぁー、素敵ー、ということは私の結婚相手はこの難題を出した相手、大伴御行ね！」

と言った。よかった、なんとかごまかせたみたいだ。

「……って、んなわけないでしょうがああっ！！」

訂正、やっぱり駄目でした。

そう思いながら俺は輝夜に殴られたのであった。

4話（後書き）

いつのまにかお気に入りに登録されている…。
こんな駄文を登録していただき、ありがとうございます。

5話

「で？あなたは何者なの？」

どうもカービィです。輝夜に捕まっちゃいました。今の俺の状況は、足をつかまれ逆さにぶらさげられて尋問されている状態です。

「へへ…、嬢ちゃん中々良い拳を持っているじゃないか…」

「もう一発いつとく？」

「カービィと名乗る小妖怪でございます！」

綺麗な笑顔で物騒なことをいう輝夜に恐怖を感じた俺は、慌てて輝夜の質問に答えた。

「カービィ？カビの妖怪かなにかかしら？」

「この愛くるしい姿を見てカビだと！？違う！断じて否！」

なんと失礼な事を言う女だろう。美人だからといって全てが許されるわけではないぞ？

「で？そのカービィがこの屋敷に忍び込んで何の用？」

俺の目的は、街で噂のかぐや姫を一目見ようとしていただけだと告げる。

「へえ、この私をねえ。で？なにか感想はあるかしら？」

「意外と暴力的なんですね」

「H A H A H Aと笑いながら言うつぶん殴ってきた、そういうところが暴力的だというのに。」

「なにか他に言うべきことがあるでしょう?」

「この世の者とは思えないほどの美しさとかさ、と言う輝夜に俺は本心を言った。」

「そうだな、あんたはとても優しい心を持っている。それだけは確かなことだな」

驚いた様子の輝夜。

「あら、どうしてそんなことが言えるのかしら?」

「理由? そんなの決まってる。なぜならあんたは…」

「苦し紛れの俺のボケに律儀にノリツツコミをした。優しいにきまて」
「忘れなさい」イダダダダ、抓らないでくれ」

顔を赤くしながら俺の頬を抓る輝夜。後で指摘されて恥ずかしがるぐらいなら、最初からやらなければいいのに。

「はあ、あんたと話していると疲れるわね。もういいわ、今日のことろは帰きなさい」

あんた害はなさそうだし、と俺を解放する輝夜。

「そんな！せつかく友達になれたのに！？」

「いつ友達になったのよ…私、あなたに暴力しかふるってないんだけど…」

疲れた様子で輝夜は言う。一緒に馬鹿騒ぎしたら、だいたい友達だとおもうけどなあ。

「別に二度と来るなって言ってるわけじゃないわ、今日のところはって言ったでしょう。あなたという暇をつぶせそうだし、またここへ来なさい」

今日はもう疲れたから寝るわ、と輝夜は言った。これはまさか…

「最初のツンからちょっとだけデレ期に突入！？オリ主らしく、フラグを建てることに成功したのか？」

「あなたの言ってることはよく理解できないけど、これだけはなんとなく言っておくわ、違う！」

なにはともあれ、この世界に来て初めての友達ができました。

5 話（後書き）

ご感想お待ちしております。

6 話（前書き）

最近ネタが尽きてきたので、更新が遅くなるかもしれません。
ご了承ください。

6話

輝夜と出会って数日が過ぎた。あれからいろいろあった。結局五つの難題をクリアした人が出なかったり。俺が人に見つかりそうになったので慌てて『ストーン』でマツチヨな石像に変身し、それを輝夜が必死にごまかしたり。それが原因で輝夜に殴られたり。そんな楽しい日々を送っていた。

しかし、そんな日々も終わりが近づいていた。

「月に帰る？」

「そ、私元々は月からきたの」

そういや、かぐや姫ってそんな話だったな。

「月かぁ、行ってみたいなぁ…」

今度ワープスターで行ってみるか。『銀河に願いを』でも宇宙空間渡ってたし、たぶん大丈夫だろう。

「そんなにいい所でもないわよ」

そう言っただけ輝夜はため息をつく。

「帰りたくないのか？」

「ええ、できればね」

「だったら無理に帰らなくてもいいんじゃないか？」

「そうは言っても、向こうが黙っちゃいないのよね」

なんと、無理矢理さらおうというのか。

「だったら俺にまかせろ、俺が追い払ってやる！」

「無理ね、ただの一妖怪にどうにかできる相手じゃないわ」

えっ、そんなに強いのか？

「月の技術がどれだけ進んでいると思うの？そこらへんの妖怪なんて、あっというまに蹴散らせるわよ」

そんなに強いのか。そういや二次創作とかでは永琳がやってきて助けてくれるとかだったし、俺の助けなんてなくても平気か？

「わかった、見送りに来るだけにしておくよ」

「そうしときなさい、死にたくないならね」

一応心配だから、ワープスターでこっそり後をつけよう。

いよいよ輝夜が月に帰る日が来た。帝が兵を大勢来させていたが、おそらく御伽噺で語られるとおり、なんの役にも立たないだろう。

「さて、どんなのが来るのやら」

俺は外で見送ることにした。輝夜は竹取の翁達と一緒にいるから輝夜の傍にすることはできない。輝夜を迎えに来る宇宙船を少しドキドキしながら待つ。しかたないじゃん、宇宙船は男の子の憧れなんだから。

「むっ、来たか」

突如空が昼のように輝き、宇宙船が姿を現した。兵は次々倒れていき、何人が堪えながら矢を放ったが矢は宇宙船に当たることなく、すべて逸れていった。

「月の技術力ばねえ…」

啞然として見ていると輝夜が出てきて宇宙船に乗り込んだ。

「さて、こっそり後を追うとしますか」

あ…ありのまま今起こったことを話すぜ！俺は輝夜の乗った宇宙船を追いかけていたら、宇宙船が墜落した。何を言ってるのかわからねーと思うが、俺も何が起きたかわからなかった…。頭がどうにか

なりそうだった…。

「なんてネタに走ってる場合じゃねーな。輝夜は無事か？」

あつ、下で永琳が輝夜を守りながら月の兵士と戦ってるっぽい。

じゃあ、加勢にいきますか！

「永琳っ！」

私は銃で撃たれた永琳のもとに駆け寄る。宇宙船は永琳が壊し墜落させたが、それでも生きのびた月の兵士は私たちを逃すまいと何発も銃を撃ってくる。永琳は私を守りながらじゃうまく戦えない、このまま捕まって月へ連れて行かれるのだろうか、となかば諦めかけていると。

「ワープスターだッ！」

最近できた私の友人が、いつもと違い無駄に濃い顔をし、すごい勢いで兵士達の上に落ちてきた。

6 話（後書き）

ご感想お待ちしております。

7話

どうも、カービィです。とりあえずDIO様っぽくワープスターで特攻してみました。スマブラを思い出して、いつかやってみたかったんですよね。

「と、いうわけで大丈夫か輝夜！」

「カ、カービィ！？何でここに？」

うむ、大丈夫そうだ。

「話は後だ、今はこいつらをどうにかしないと」

そう、月人たちは今のスマブラ式ワープスターの特攻で数が減ったが、それでもまだ3人残っている。

「さあ、かかってこい。俺は逃げも隠れもしないぞ！」

「無理よ！あなたみたいな小妖怪が勝てるわけないでしょ！」

そう俺を止める輝夜。だが男にはやらなければならないときがある。

「心配するな、俺が追い払ってやるって言っただろう。さあ、撃てるもんなら撃ってみろ！」

そう言くと月人達は一斉に撃ってきた、計画通り！と顔がゆがむのが自分でわかる。

「リフレクトガード!!」

俺はすぐに『ミラー』になり、バリアを張った。バリアにあたった銃弾は、撃った本人の所へ戻っていった。

「ぐわあ!」「ぎゃあ!」と自分の撃った弾にあたり、悲鳴を上げ銃を落とす月人、今だ!

「くられ!『スパークスパーク』!」

64に出てきたミックスコピー能力『スパークスパーク』を発動させる。俺を中心にリーダーのようなものが展開され、そのなかの敵に電撃を食らわせる能力だ。

「『『『『ぎゃああああ!!』』』」

月人達は一人残らず気絶した。さすが俺、一人も殺すことなく無力化してやった。

「輝夜、もう無事だ…ぞ…?」

後ろに振り返ると黒焦げになって倒れている輝夜と永琳。あれ?そういえばさっきの『スパークスパーク』の時、悲鳴が多かったよう…。

「…か、輝夜!いったい誰がこんなひどいことを!」

「あんた以外にいるかあああ!!」

電撃をくらっただけで、すぐにツッコミができる輝夜を俺は心の底

から尊敬した。

「何はともあれ姫様も私も助かったわ、ありがとう。ほら、姫様も」

「そうね、それに関しては礼を言っとくわ。それにしても、あんた見かけによらず強かったのね」

電撃のダメージからすぐに復活した永琳と輝夜が言う。不死の体ばねえ。

「はっはっは、もつと褒めてもいいんだぞ」

「調子に乗らないの」

あの後、気絶した月人達は復活した永琳がとどめを刺していた。正直、元人間の俺からしたら人と同じ姿の相手の命を奪うのは気が引けたが、そこはしょうがないだろう。

「で？輝夜達はこれからどうするんだ？」

「そうね、これからどこか月から見つからない場所でも探してみるわ。あんたはどうする？私たちと一緒に来る？」

輝夜にそう誘われる。それも楽しそうだが…

「いや、俺は一人で旅をするよ。もともといろんな所を見て回るつもりでいたから」

よくよく考えれば、旅に出たつもりなのに輝夜のいた都にしか行っていない。どうせなら、もっといろんな所を自由気ままに見て回りたい。

「そう、残念ね。まあ、あんたがそう決めたならしょうがないわ」

そう残念そうに言う輝夜。そんな顔するなよ。

「じゃあ、またいつか会おう」

「ええ、いつかきつと」

「また会える日を楽しみに待ってるわ」

別れの挨拶をすませ俺はワープスターに乗る。さあ、出発だ。俺の気持ちを読み取ったがごとくワープスターが動く。

「じゃあなー！輝夜！永琳！」

そう声をかけながら、俺は地面から離れていった。

俺の旅はまだ始まったばかりだ！ 完！

「あ、妹紅に会ってない」

他の原作キャラに会い損ねたことに気づいたのは、数日経ってからだった。

7 話（後書き）

一応まだ続きます。

ご感想お待ちしています。

8話

どうも、カービィです。あれから数十年経ちますが、なかなか原作キャラに会えません。

「やっぱり輝夜たちについて行ったほうが良かったかな…」

そこら辺の妖怪で作ったお弁当を食べながらひとりごちる。やっぱり一人は寂しいんです。

「仲間がいればな…ん？仲間…？」

まさかとは思うが、ちょっと試してみよう。『ソード』になって…

「ヘルパー、出てこいやあ！」

力を放出する感じで念じてみるとあら不思議。緑の鎧を着た剣士、ブレイドナイトが誕生した。

「いよっしゃああああっつー！！仲間来たー！！！！これで勝つる！」

お前何と戦ってんだよって？ 孤独とさ…

「というわけでお話TIMEだ！君名前は？ってブレイドナイトだよね、知ってるのに何妙なことを聞いてるんだろ俺。俺の名前はカービィって言うんだ、よろしくな。さっそくだが好きなものの話をしよう。え？お見合いみたいで恥ずかしいって？へへっ、そんなこと言っなよ。やっぱり仲良くなるためにはお互いのことをよく知ら

ないといけないと思うんだよな。俺の好きなことっていうか趣味は料理かな？作るのも食べるのも大好き！っていうか、それぐらいしか娯楽がないんだよね。ほら、俺って旅してるから友達ができてもすぐ別れることになるし、一目見てすぐに妖怪ってことがばれるから旅先の村とかで人間と仲良くするってこともできない。だから一人でも食べたり作ったりで楽しめる料理が好きになったんだ。今度ブレイドナイトの好きな料理作ってあげるから好きな料理教えてよところでブレイドナイトって名前長くて言いづらいね、あだ名つけても良い？やっぱり名前を縮めてブレイドとかナイトとか？それともブレちゃんって愛嬌があったほうがいい？いきなり馴れ馴れしいと思うだろうけど、今まで一人で旅してきたから寂しかったんだよ。今までどんな時も一人だった、雨の日も風の日も夏の暑い日にも冬の寒い日にも、多くの妖怪に襲われた日も陰陽師に退治されそうになった日もあった。ところでこれ最後まで読む人いるのかな？なんてメタ発言はおいといて。とにかく俺はもう一人じゃない、君という仲間が増えたのだから。さあ、話し合おう。お互いの好きなもの、嫌いなもの、趣味、特技、好みのタイプにいたるまで。日が暮れるまで、夜が明けるまで、徹底的に話し合って友情を深めようではないか。…ってさっきから反応がないけど話聞いている？」

いままでの寂しさからようやく解放されると思い少々暴走してしまったが、どうにも様子がおかしい。ブレイドナイトの反応がないのだ。

「おい、ブレイドナイトー？」

呼びかけても反応がない。ふむ…どういうことだろう。

「聞こえてるなら右手をあげて」

あつ、ちゃんと右手をあげた。こっちの声は聞こえてるみたいだ。
…なんか嫌な予感がするな。

その後も指示を出したりしてわかったが、どうやら俺の生み出すヘルパーは自意識がなく、俺の意思通りに動く存在らしい。

「なんだよ、せつかく寂しい一人旅から解放されたと思ったのに…。よく考えたら、そうしないとウィリーに乗るときとか困るもんない」

自分の思い通りに動かない乗り物なんて、危なくて乗れないもんな。

さっきとは打って変わって一気にテンションが下がる。リアルでorzな体勢になった。いや、カービィの体だからうつ伏せみたいになつてるけど。せつかく仲間ができたとおもったのに…。

「…しかたない、ウィリーバイクに乗って気分を変えよう」

ヘルパーが出せることがわかっただけでも収穫だ。戦闘になったとき少しは楽できる。

そう考えながら俺はヘルパーをウィリーに変え、それに乗りその場を後にした。

追伸、ウィリーバイクはなかなか乗り心地がよかったです。

8 話（後書き）

途中の長いセリフめだかボックスのアレを目指したのですが、途中で挫折しました。

ご感想お待ちしております。

9 話

どうも、カービィです。前回出てきたヘルパーですが、指示を出す
と後は自動で敵と戦ってくれるので結構重宝しています。

さて、現在の俺ですが。

「おおーっ、すっげえー！」

大量の向日葵が咲いてる場所に來ています。ワープスターで適当に
飛んでたら見つけたので、降りて近づいてみました。東方で大量の
向日葵といったら、やっぱりフラワーマスターこと風見幽香さんで
すよねー。

「…見つからないうちに逃げよう」

東方の二次でDSと名高い幽香に会ったらどんな目にあうかわかつ
たもんじゃない。こんな危険な場所にいられるか！俺は帰る！

「あら？誰から逃げるのかしら？」

「そりゃ勿論、風見幽ぎゃああああーっ！っ！」

うわははははは ご本人が後ろにいましたアあああ、いつの間にか
あああー！

やばい！パニックってマニアックな物真似をしている場合じゃない！
ここは冷静になってごまかさなければ！

「ポ…ポヨ？」

頼む、この俺の超キュートな仕種でごまかされてくれ！

「あら、いきなりしゃべれなくなったの？叩けば直るかしら？」

「すいませんでしたー！！」

俺はあわててスライディング土下座を行った。

「人と話してるときに寝転ぶなんていい度胸ね」

「いえ、これは土下座です！この体型ではわかりづらいかもしれませんが土下座です！」

いや、落ち着け！俺！いくらドSといっても俺みたいな弱そうな妖怪に興味を示すなんてことは…。

「ところで、あなたひょっとして最近噂になってる妖怪かしら？」

「はい？なんのことでしょう。俺は別に噂になるようなだいそれた妖怪じゃ…」

「妖怪を調理して食べる恐ろしい妖怪が出るって」

「あつ、俺だ」

へー、俺ってそんな有名に…じゃない！

「へー、やっぱりね」

興味持つてらっしやるうう！！！！やばいよ、これ！！なんで俺
ごまかさなかったの！？馬鹿なの！？
死ぬの！？

「ここに来たと言うことは、私も食べに来たのかしら？」

「めめめめっそうもございません、あなたの様な大妖怪を食べよう
なんて。そんな恐ろしいこと考えたこともないです。むしろ今すぐ
ここから逃げ出したいくらいで」

やばい！めっちゃ満面の笑みでこっちを見てくる！

「駄目よ、私はあなたに興味があるもの。妖怪食いの妖怪と恐れら
れてるあなたにねっ！」

そう言つて幽香は右手に持った傘を振りぬいてきた。ぎゃー！かす
った！今かすったよ！？っていうか俺ってどんな噂になってるの？

「うおおおおっっ！！ヘルパー召喚っ！！！」

この土壇場で能力が進化したのか、すっぴんの状態からナックルジ
ョーを生み出した。さすが俺。

「あら？使い魔か何かを生み出す能力かしら？でもこの程度じゃ
私を止められないわよ！」

うそーん、ナックルジョーが瞬殺されました。さすが大妖怪、ハン
パねえ。

「さあ、見せてみなさい。妖怪食いの妖怪の力がどんなものか」

笑顔でこちらが向かってくるのを待つ幽香。もう逃げられない、ワ
ープスターは呼び出すのに少し時間がかかるし、ヘルパーでは足止
めにならない。…しかたない。

「出て来い…『マスターソード』」

俺は右手に鏡の大迷宮のラスボス戦の装備である『マスターソード』
を呼び出した。ラスボス戦のコピー能力を使うのは、これが初めて
だ。だが、幽香と勝負するには強力なコピー能力でないと駄目だ！

「いくぞおおっ！風見幽香ああっ！」

カービィの勇気が幽香を倒すと信じて…！

ご愛読ありがとうございました！

9 話（後書き）

一応まだ続きます。

感想お待ちしています。

10話（前書き）

やっとWiiのカービィが買えました。
そのうちコピー能力を出すかもしれません。

10話

「いくぞおおおっ！風見幽香ああっ！」

そう叫んで俺は相手にドリルのように突っ込む技、『スパイラルソード』を使い特攻した。

絶対幽香なんかには負けたりしない！！

幽香には勝てなかったよ…

どうも、カービィです。え？早すぎるって？ガチな戦闘は慣れていないんです。今まで倒した妖怪は格下ばっかで、ただの捕食だったし。『クラッシュ』を使えばいいじゃんって？それでも倒せるかどうかわからないのに、花畑を巻き込んでめちゃくちゃにしかねない技は使えません。もし戦闘不能まで追い込めなかったら、間違いなく罠に殺しにされます。

「というわけで、顔が殴られて肛門みたいになったことだし、そろそろ見逃してもらえませんか？」

「あら、女性にそんな下品なこと言うなんて、まだ殴りたいのかしら？」

めっそももない、と顔を戻しながら言う。これ以上変形してたまるか。

「それにしても噂を聞いて少しは期待したけれど、あまり強くなかったわね」

なんと、昔輝夜に強いとほめられたのに。大妖怪にはこれぐらいじゃ通用しないとでも？

「異議あり！さっきはリーチが短いのに接近戦をいんどんだ俺が悪かったんだ。遠距離から攻撃すれば、あんたにも勝て「へえ」…るまではいかなくても苦戦させられたらいいなあって…」

今とんでもない殺気がきたよー。人間ボディだったら確実に失禁してたよー。

「面白そうね。いいわ、チャンスをあげるからもう一度かかってき

なさい」

よしっ！今度は斬撃を飛ばす波動切りで攻めてみよう。そう思いながら幽香から離れていく。

「ここら辺でいいかな？よしっ、いくぞ！風見幽香！」

振り返りながらそう言うのと、目の前には激しい光が。

うん、マスタースパークのこと忘れてた。っていうか、チャンスをやるって言うときながら攻撃の暇もあたえないってひどくね？

そう思いながら俺は光の奔流に飲み込まれた。

「ということで、そろそろ行ってもいいですか？幽香さん」

「…あなただいぶ頑丈ね…」

黒焦げになり、Mr.ゲーム&ウォッチをコピーしたみたいになった俺が言うと幽香は呆れながらそう言った。

「もういいわ、その頑丈さに免じて許してあげる。なんだかあなたと戦っているとアホらしくなってくるし」

こんだけボコボコにしているってその言い草はないんじゃない？怖いかな

ら言わないけど。

「まあ、また来たくなったらいつでも来ていいのよ？あなた、いじめると面白いし」

妙な気に入られ方したー！？

「結構です！それではこれで失礼します！」

ここにいたら命がいくつあってもたりない、そう思いながら俺はその場を後にした。

あの人絶対友達いないよ！

そんなことを考えてたら後ろからマスタースパークが飛んできた。
あの人エスパー！？

10話（後書き）

戦闘シーンを期待してた皆様ごめんなさい。

ご感想お待ちしております。

11話（前書き）

本格的に書くネタが尽きてきた…

亀更新になるかもしれません。

11話

どうも、カービィです。前回幽香にこっぴどくやられたので、ちょっとくら修行をしてみたいと思います。

「といつても、何すりゃいいんだろう…」

修行っぽいことだったらこの世界に来て最初の数年間の特訓だったが、あれは今の体の動かし方やコピー能力の使い方を学ぶために戦いまくっただけだしなあ…。一番上達したのが、倒した獣や妖怪を調理した『コック』というのが俺の性格を表してるよなあ…。

「こうなったら、漫画とかからパクっ…もとい真似してみよう！」

まずは『ファイター』のパンチの威力を上げるために感謝の正拳突きを一日に一万発だ！

「打倒風見幽香！いくぞーっ！っ！」

そのまま俺は祈り、感謝し、打つの動作を何度も繰り返した。

十分後には飽きてやめた。

「はあ…手っ取り早く強くなれないかなあ？」

そんな楽に強くなれたら誰も苦労はしないが、それでも呟いてみる。
そして他になにか強くなる方法はないか、考えてみる

「そっぴいあ、この前すっぴんの状態でヘルパーを呼び出せたよな」

幽香との戦いを思い出しながら気づく、ひょっとしてこの体は結構
応用が利くんじゃないかと。

「試してみるか、ヘルパー召喚！」

俺の呼びかけに応え、ヘルパーが生み出される。

「まだまだ！ヘルパー召喚！」

すると、さっきとは違うヘルパーが召喚された。

「おお！やってみたらできるもんだな！いざとなったら弾除けにな
るんじゃない？」

ちょっとテンションがあがってきた。その後も何度もヘルパーを召
喚するたびに、同じ種類のヘルパーは呼び出せないことに気づく。

出せる数には限界があるか、まあ無限に生み出してもしょうがないからいいか。用がないので、すぐにすっぴんビームで消す。

「さて、次はコピー能力について考えてみるか」

64ではコピー能力をミックスすることができた、ドロツチエ団では『ソード』や『ボム』に『アイス』などを混ぜて属性をつけることができた。この体に応用が利くなら他の能力を組み合わせることも可能だと思う。

「…試して見るか、『ファイター』+『トルネイド』！」

某仮面ライダーを参考に考えてみた組み合わせ、身体能力を上げる『ファイター』に風を身に纏うことができる『トルネイド』。

「やった、できた！」

意外とやってみたらできるもんだな、次は技をためそう。

「おおおおっ！竜巻旋風脚っ！！」

回転しながらの蹴りを放つと、予想通り体が風で加速される。

「やっべ、テンション上がってきた！」

その後も調子に乗って風で加速された攻撃を放ちまくる。

最終的に回りすぎて気分が悪くなった。調子に乗るのはほどほどにしておこう。

11話（後書き）

我ながらオチがまいち…

ご感想お待ちしております。

12話（前書き）

今回はいつも以上に短いです、ご了承ください。

12話

どうも、カービィです。前はコピー能力で実験を行いましたが、今回は神からもらった携帯について調べたいと思います。

まずは、『エアライドの機体は出ないのか?』と感想…げふんげふん、ガイアが俺に囁いているのでそれから確かめることにしよう。適当にボタンを押してつと、神が用意してくれてりゃ良いんだが…。

待つこと数秒、空の彼方からいつもと違う形の物が飛んできた。あの翼の形をした機体は『ウイングスター』か?俺の近くに止まったので試しに乗ってみる。おお、良い乗り心地だ。

その後も他の機体を呼んでは乗り比べること数回、うっかり木や岩に激突した回数は数十回、ある程度の確認は終わった。どうやら大体の乗り物系は呼べるらしい。戦艦ハルバードやWiιに出てきたランディア(ただし、ヘルパーと同じように自意識がない)、天かける船ロアも呼べた。何この携帯、後付設定…もとい神が作っただけあって俺よりチートなんですけど…。まあいいや、気にしないでおこう。っていうか、わざわざいろんな機体を用意してくれた神様ありがとう。

携帯が俺より凄いことにへこみつつ次に確認するのは鏡の大迷宮であつた使い方だ。この作品でカービィは4人に分かれた自分自身を呼び出していた。俺も同じことができるなら戦力アップになるんだが…、試してみるか。

ちょっとドキドキしながら携帯をかける。すると鏡が現れ、そこから赤、緑、黄色の俺が出てきた。

「なんという『Dirty deeds done dirt
heap』“いともたやすく行われるえげつない行為”」

別に触れ合っても消滅とかしないよな…。

俺が何人もいるとか気持ち悪いので、自分で呼んでおいてなんなんだがすぐに帰ってもらう。あの3人はどこから来てどこへ帰っていくのだろうか…。なんか考えると怖くなってきた。

「ま、まあ深く考えなくてもいいよな？さて、コピー能力の実験で
もしよーっと」

俺は現実逃避気味に他の事を考え始めた。まあコピー能力の研究も
大事なしいいよね？

12話（後書き）

だいぶ後付設定がひどい…。でも調べてたらエアライドって結構ネタに使いやすそうなのでこのまま行きます。

感想お待ちしております。

13話（前書き）

お気に入り登録が100件をこえていた…だと？

こんな駄文を読んただきありがとうございます。

13話

「そのあなた、止まりなさい！」

どうも、カービィです。鼻歌を歌いながら歩いていると、どこからともなく声が聞こえました。

右確認、誰もいない。

左確認、誰もいない。

後ろ確認、やっぱり誰もいない。

「なんだ、幻聴か」

「ちょっと待ちなさい！上よ、上！」

再び歩こうとしたら、また声が聞こえる。しかたなく上を向くとそこには翼の生えた黒髪の少女が、確証はないが見た目的に考えるとこの天狗は射命丸文だろうか？

「天狗？ふむ、白か」

「そうよ、って白ってなに？…って見るなああっ！」

なにが白かも言ってないのに、思いっきりドロップキックを食らいました。パツと見えただけだったが、やっぱり白だったか。なにがとは言わないが。

「それでなにか用かな？白い下着の天狗さん」

「わざわざ口に出すなああっつ！！」

顔を赤くした射命丸（仮）から、またも蹴りを食らう俺。このつい
ついボケてしまう癖、どうにかならないだろうか。

「それでなんの用でしょうか？天狗のお姉さ…いちいちこう呼ぶの
もなんだから、よろしければ名前を伺っても？」

「私？射命丸文よ…って自己紹介してる場合じゃないわね、今すぐ
ここから立ち去りなさい！」

やっぱり射命丸だったか、（仮）は取っところ、となるとここから
先は天狗たちの縄張りってことか。…ん、待てよ？

「人間や大妖怪ならともかく、どうして小妖怪の俺まで立ち入り禁
止になるんだ？」

ちょっとした疑問が出てくる、いちいち見た目知性があるかどうか
わからない小妖怪まで追っ払っていたらきりがないだろう。

「あなた、あの噂知らないの？」

噂？なんのことだろう。

「妖怪を襲っては食べてしまう妖怪食いの妖怪の噂よ」

OK、理解した。つまりは俺が悪いつてことだな。

「最近この近くに現れたって噂だから用心してるのよ、あなたみたいなのが噂の妖怪だとは思わないけど特徴が一致するから一応ね」

「へー、なるほどねえ」

「そういつわけだから早く他の場所へ行きなさい。まったく、ただでさえ謎の空飛ぶ船が現れて皆が警戒してるこんな時に手間かけさせて…」

「ごめん、そっちも俺だ。それはともかく言いたいことは理解できた。だがそう言われると意味もなく通りたくなるのが人情ってもんだよね。」

「と言うわけで、ここは突破させても」「入るなって言ってるでしようがあっ！」「うばあっ！」

さすが後の幻想郷最速、蹴りがまったく見えなかった。速い、速すぎるぜ。

「だが速さでは俺も負けてられねえ。行くぞ！『ジェット』！」

「っ！姿が変わっ…！」

射命丸が言い終わらないうちに、俺はエンジンを起動させ空を駆けた。

「ヒヤッハーツ！天狗の縄張りに侵入だーっ！」

… 5分後

あっさりと侵入者用の罠に引っかかった俺は、後から追いついてきた射命丸と巡回していた天狗に捕まった。天狗たちの話から察するに、俺はこれから裁判にかけられ処分を下されるそうだ。

「どうしてこうなった」

「自業自得って言葉知ってるかしら？」

表情は笑顔なのに怒りのプレッシャーを放ってくる射命丸。さて、どうやってこの場から逃げ出そうか…。

13話（後書き）

感想お待ちしています。

14話（前書き）

ちよつと展開に無理があるかもしれませんが
この作品はノリで進んでいるので細かいことは
気にしないようにしてください。

14話

どうも、カービィです。前回のあらすじですが天狗に捕まっちゃいました、現在護送中です。

「ほんと、どうしてこうなった」

「あなたが私の忠告を無視するからでしょうが。まったく、すぐ処刑されないだけありがたいと思いなさい」

近くにいた射命丸が俺にそう告げる。

「ちゅうこく？『チューして告白する』を略した言葉？やっだー、文ちゃんったら大胆だなあ」

「あああああつっ！！むかつくっ！！こいつマジむかつくうっ！！」

ちよつとからかっただけで頭をかきむしりながら苛立つ射命丸、カルシウムが足りてないんじゃないかな？

「というわけで、もつと小魚食えよ射命丸」

「なにがというわけよっ！あんたぶん殴るわよっ！」

まったく俺が出会う女性はこうも暴力的な人ばかりなんだろうか、わけがわからないよ。

そんなこんなで檻の中に閉じ込められました。侵入者用の牢屋とかがあるらしいけど、俺の体が小さいため隙間から逃げられそうだと

いうことで獣を捕獲した際の小さめの檻に入れられた。…すごく、獣臭いです…。

「さて、これからどうしよう…」

正直逃げ出すのは簡単だ、『ソード』とかで檻を壊した後『マイク』などの広範囲攻撃をしながら逃げればいい。だが今回は100%俺が悪いからなあ…、これ以上迷惑かけるのはちよつと…。

「まっ、なるようになるか」

そうひとりごちて俺は眠りについた。

次の日、俺は檻の中に入れられたまま建物の中に連れ込まれた。いや、俺の体型的に縛っても意味ないとはいえこの扱いひどくね？なんかペットみたいじゃん。

建物の中には俺を捕らえた射命丸と巡回してた天狗、他にも強そうな天狗たち、その中にも一際大物オーラが出ている奴がいる。やべえ、俺みたいな小物の起こした騒動でこんな大物が出るとは…。ちよつと調子に乗りすぎた。

そんなことを考えていると、その大物っぽい爺さんがしゃべりだし

た。

「ではこれより裁判を行う、被告をこちらへ」

その言葉通り俺は運ばれていった、いや檻から出してくれたら自分で歩きますよ？どうせこんだけ囲まれてたら逃げづらいし。

「では罪状を読み上げる。被告は昨日注意されたにも関わらず、我らの領地に無断で踏み込んできた。なにか申し開きはあるか？」

「ポヨ？」

とりあえず言葉が理解できないふりをしてごまかしてみる。あ、射命丸が突っ込みたそうにこっちを見ている。

「貴様！ふざけてるのか！」

あ、他の天狗から野次が飛んできた、爺さんも少しお怒りの様子。

「まあどんな言い訳をしてもお主のやったことは我等天狗に齒向かったこと、小妖怪如きがそんなことをするなど言語道断、判決は死刑じゃ！…と言いたいところじゃが、お主…妖怪食いの妖怪じゃろう？」

「な…、なぜそれを！？」

俺は自分から妖怪食いの妖怪なんて言ったことは一度もない、この爺さん一見ただけで俺の正体を見破ったと言っのか！？

「桃色の球に手足と顔がついた姿！そんな珍妙な姿した妖怪お主に

外に見たことないわ!」

ですよー。

あの爺さん…天魔というらしいが、天魔が言いたい事は俺を見逃してやるということだった。なんでも妖怪食いの妖怪を処刑しようとしても、抵抗されれば被害がどれだけ出るかわからない。だったらなかったことにしてやるから、とつとここを立ち去れとの事だ。まあ確かにいざという時は『クラッシュ』なり『マイク』なりを使って脱出するつもりだったから天魔の判断は正しいものだっただろう。これ以上迷惑かけないんじゃないかなかったかって? 結局は自分の命が一番ですよ。

それにしても、ちょっとした悪ふざけがこんな大事になるとは…。少しは自重しよう。

立ち去るとき、射命丸にすごい殺意のこもった目で見られた。やべ

え、からかいすぎた……。今後会うときは気をつけよう。

14話（後書き）

次の更新は少し遅れるかもしれませんが

ご感想お待ちしております。

15話

どうも、カービィです。ここところ幽香といい射命丸といい、原作キャラの俺への扱いがひどいと思う。というわけで、優しくしてくれそうな原作キャラを探してみたいと思います。動機が不純？人間なんてそんなもんですよ。

「というわけで、優しそうな星蓮船メンバーに会いに来ました」

そこらへんの妖怪から聞いた噂によるとこの辺なんだがなあ…。ん？あれは…。

ふと見ると妖怪が女性に後ろから襲い掛かろうとしている。目の前で人間が襲われるのは、元人間として見逃せない。

「というわけで、そあい！」

俺は『ファイター』になりスマッシュパンチを妖怪にあてた。ダメージを受けた妖怪は、そのままどこかへ逃げ出した。そこで異変に気づいたのか、女性がこちらへ振り向いた。

「大丈夫ですか？お姉さ…」

女性に声をかけようとしたが、そこで俺の声は止まった。この特徴的な服装と髪、どうみても聖白蓮さんです。助けはいらなかったです、ね、っていうかなんというご都合主義。

「あぶないところを助けていただき、ありがとうございます」

「いや、あなたほどの実力者だったら別に助けがいらなかったと思いますけど…」

俺たちは今、白蓮の住む寺へ向かっている。白蓮がなにかお礼がしたいと言っているので、ならば食事をご馳走になろうということの話がついたからだ。しばらく歩いていると建物が見えてきた。

「あれが私の住む寺です」

「ほう、あれが」

「人に見つかるといけないので、念のため裏から入りましょう」

俺の見た目完全に妖怪だもんな、カービィボディはこういうとき不便だ。

そう思いつつ寺へ近づく、そのとき寺から誰かが出てきた。

「あ、姐さん、お帰…ッ」

あの尼さんのような服装、間違いなく雲居一輪だろうな。ってなんでこっちを睨んでるんだろう？

「姐さんっ、離れてっ！そいつ妖怪食いだっ！」

ああ、そういう事。そりゃ警戒するわな。でもこの可愛らしい見た目のせいで妖怪食いと思われなのに、よくわかったな。

「雲山！来てっ！」

雲山呼んだし一輪で間違いねーな。そーいや作者って一輪結構好きなんだよなー、じゃー反撃とかできねーなー。

そんなメタな感じで現実逃避を行っていた俺は、雲山の大きく重い拳をくらった。

15話（後書き）

次回から更新が遅くなるかもしれません

感想お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0116z/>

東方桃球伝

2011年12月20日18時49分発行